

の詩句を味い得ないけれども、鬼はそれを十分に楽しみ得る。俗人が現実の酒に酔うがよい。われ李賀はそれよりも一そう陶醉な酒を、現ならぬ遊宴を創造して、死者とともに楽しむ、という意味がないでしょうか。白玉冷が冷でなくて春暖を、琵琶調が健ならぬ感を去うように、唐人の詩句の多くが指月で、時として字句の表面とは全く別のものを指すことを想えば、そういう風に解釈して好いのではないのでしょうか。「焦氏易林」に、延頸望酒、不入我口。深以自喜。という如く、人を棄しませる酒は欲望の酒で、飲む酒でないとするれば、酒の享樂は酒池肉林の中にはなく、却って劉伶が墳墓の中に在りと言い得るかも知れません。孰れにしても李賀の歌ったのが欲望の酒であり、ひいてそれが墳上土に到ることを李賀が確信したこと、俗人がそういう眞実の酒を知らないことを彼が憐んだことは確かでしょう。(昭和二十九年九月二十六日)

2 先日 は 方向五号を頂きまして有難う。……李長吉論は愈佳境に入り、彼の藝術の中核をつき始めましたが、則私去天の御腕には深く共鳴致します。吾々に最も直接具体的ものはわれわれの体験の行かにはないから、藝術の基礎は固より私でなければならぬと思えます。美人梳頭歌の御訳には全く感歎致しました。御稿で此詩がよく判りましたが、殊に捲上る轉體につれて、それに引かれて面苑の身体が起き伸びるような奇妙な感覚がよく感じられました。その為か、何かひいやりした井戸水のような冷感が全篇にこめるようで、無声不語などの語が静けさという以上の全篇のように冷い沈黙を表しているように感じられます。昔人不語向何処は明らかにその沈黙の後姿を黙って眺める人の感覚で、向何処というのも随分冷い言葉のように感じられます。普通の

らば人に命じて折らせる花を、わざわざ階を下りて自ら折るその異常な動作を、冷やかに眺める人の針のように細い神経、少しの物音にも堪えられない神経が、無聲と不語とに浸っているのかも知れません。また釜蓋引は、音と写象との間隙の生起を示す作として殊に興味深く、普通の言葉が身体の行為的反応を惹起するに反して、藝術音が写象となって展開する相違をよく示していると思えます。最も普通の場合には写象が無意識のうちに展開するので気付かれなければ、意識の日常的統一を破れば、写象は自らその中に氾濫するでしょう。要するに長吉の理は人理ではなく鬼理かもしれませぬ。……李長吉は少し鬼をてらうような癖がありますが、夢は全くこの世から冥界に住んだ人でしょう。（昭和三十年八月十五日）

なお、李賀について御承知と存じますが逆之の「金壺記」巻下に「李賀、字長吉、其手筆精捷」という語があります。また先日「楚辞集注」に収めた李賀の評は、蘇軾について「感慨沈痛、誦之有不能欲泣者、其為人臣可知矣」天問について「天問語、甚奇峭、千楚辞中可推第一、即周禮亦可推第一、皆極嗜好之、時居南園教習、忽得文章、何処哭秋風之句」その他になつています。白、気付きましたま。雙々。（昭和三十一年七月三十日）

4 方向の李賀論、愈佳境に入り、殊に引員の歴史と藝術との対比のあたり、人間存在の秘奥への幽深の展望が開かれて、面白く拝読致しました。還自会稽歌は後に重葎の還金陵詩の台城柳に余響を遺しているようですが、やはりちがいますね。昌谷詩についてのユリシイズとの御比較も、ちやうど芭蕉や蕪村の連句と、ジョイス・フルストラとの類似を考えていたときで、全く其鳴致

しました。溯って考えると、御詠しになった日出東南隅などの漢代の歌謠にもそういう聯句的なものがあり、あるいはもとほ問答的に歌った手まり歌などの面影をのこしているのかも知れません。詠詩もみなそれぞれに面白いうち、やはり李賀が殊に魅惑的で「か黒なる雲 城<sup>き</sup>在<sup>え</sup>」を詠んで、ふと蕪村の句「鮫鮪や考根が城に雲かかろ」がぼんやり解りはじめたように思いました。また「惱ましき」の金銀宝玉の世界にも、異常に美しい感覚がよく出ていて、人を深く打ちます。色々の示唆を与えられつつ、ほんとうに嬉しく拝読致しました。(昭和三十一年十月十一日)

この夏は、前に載いた「方向」や幽歎集を手引にして李賀を読み、あの難解な昌谷詩に始めて親しみ得て、ほんとうに楽しみました。李賀山の騎驢錦履説の御解釈など、誠に拍案撃節の妙があり、猶御統緒を待望致して居ります。昌谷詩の御面談を比較して大へん興味深く覚え、やはりあの時代を中心になるのは執退之であることを今更に痛感し、それから皮日休——晝休とつづく伝統が浮び上って、中晩唐に対する興味を愈深く致して居ります。(昭和三十三年九月九日)

中国詩の御高説、いつも乍ら面白く拝見、露滴の天はやがて白んで紫だちたる雲がたなびき、その紫雲から、微妙な来迎の樂の音かきこえてきそうな夜天ですね。それはまだ向えていないけれども、言なき察が却って目を聳するばかり高らかに全篇に響いているようです。李賀がもし四五年長生したら、中国にほんとうの宗教詩人が生まれていたことでしょう。彼の本質は案外ヴェルレーヌかも知れません。(昭和三十三年七月二十一日)



1 先日「方向」9号を戴きまして恐れ入ります。……李賀の頌歌は、恐らく李賀の本質を誤  
 たす御つきになったもので、この筋金が一本つよく入っていて、しかもそれがすっかり変貌した  
 所に、まさしく李賀の格調の高さがあると思われます。ただの鬼語とか謎とかいうものでなく、  
 彼の詩に、根底において三代の鐘器の奇古が滲むことを論議はひしひしと人に感ぜさせます。そ  
 の作詩年代の御考定の的確妥当は言うまでもありませんが、それより以上に李賀の頌歌じしんに  
 秀らぬ奇古の高趣が論議に横溢しているのにかく打たれました。(昭和三十三年十月十二日)

8 御高論李賀の長歌短歌を戴きまして恐入ります。早速拝読。魂魄説が首尾において要に妖  
 奇に幽深な展開をとげつつありますことに身にしみるよるこびを感じました。ことに夜壑何難々  
 以後の御解は真に詩人の心靈に通うもので、長吉の詩の特徴は、まさにそれが魂にとりのこされ  
 た魄の表しい悲泣を切々とひびかせることにあるのが、実によくわかります。王維は反対に魂の  
 はるか解脫のよるこびをつねに高らかに歌って居り、その魄もまた魂につれて自ら魂化するた  
 のしさをいつも歌って、いるのが感じられます。長吉にまたこの救いがあるのでしょうか？  
 とにかく王維を魂の詩人とすれば、李賀は魄の詩人といつてよく、この二人からみると、李村で  
 は魂魄がし、くりついでいて、離れないところに、二人の詩の現実味と通俗性とがあるのではな  
 いでしょうか。李白には魂の意識がないように思われます。(昭和三十七年十二月十七日)

注

1 「方向」は第四号。「酒不到……」は「將進酒」の末句。「白玉冷」は「晝公子夜聞曲」の

の語である。

2 「笠篠引」は「李憑笠篠引」をさす。「彦泓」明の詩人で『贅雨集』の著者王次回の名。

3 本誌第二号A雜記・4 V 李薔評楚辞を参照。

4 「方向」は第六号。「か黒なる雲」は「雁門太守行」。「懶まじき」は「愷公」。

## 芸術の理解のため

1973.8.16.

デルヴォーという、奇妙な画家の名を知り、その芸術の不思議な魅惑をおぼえたのは、小林木市郎博士の『芸術の理解のために』のおかげだ。一九六〇年（昭和三五）十一月に京都淡文新社から出たその本を贈られ、むさぼり読んだ記憶が生なましい。それから四五年もたつて『美術雑誌』にぼつぼつデルヴォーの名があらわれるようになった。

だがまあ、そんなことはどうでもよい。芸術というものが、これほどわかりやすく、なっとくのいくように説かれた書物をわたしは知らぬ。シヨペンハウエルもおもしろく、アランもおもしろいという、まったく無責任で無定見な読者の一人にすぎないわたしのことだから、チヨーンもてば著者のめいれくдарうと思うか。芸術といえはまずこの本が出てきて、ついで口走らざるをえぬ。この本は翌年再版が出たきりで、古本でも見かけない。いったん手に入れたら、手はなす気にはなれないだろう。おくびにも出さぬが、この本を枕中の秘としていられるらしい文章にも、時お

り出あう。こつこつせせこましい語をすると、それでいいのです、とにこにこされる博士の顔が見えたりする。

とこゝで、ここにこの本をもち出したのは、チョーキン持ちをするためでも、私的万感傷を讀者におしつけるためでもない。この本の64 65に李翼が出てくるからである、それを左に書き写す。

## 64 男女と魂魄

人間は男であるか女であるか、いずれかである。女でも男でもない一般的な人間というものがじつ存在しないのとどうように、男女にひとしく通用する人間一般の思想や論理というものもまた決して存在せぬ。それがあつたようにおもうのは男の甘い思想にすぎない。

とにかく女は男ほど甘くない。この世が苦しいからといって、あの世がたのしいと速断するような希冀的祝賀はせつたいにせぬ。男のそういう考之には明らかに論理の飛躍がある。じつさいは、この世がすでに苦しいのなら、あの世はもっと苦しいかもしれぬ。しかもその可能性は大きい。すべてのごとを替わつてよくなる例はまれで、ます前よりけ悪くなると思つたほうがまちがいが無い。それで生をかえて死にしたとこゝろが、急にたのしくなるとはおもえぬ。むしろ今よりいっそうひどい目にあうにまわっているから、やはり苦しくても生きていくにかぎる。この世の苦しみというものは、まますたかが知れてある。しかしあの世の苦しみは想像もつかぬ。「いつまで居てもこんなもん」なら、いつまでも居たがよい。何がいるか判らぬ未知のおそろしい所へは



けきたくない。——というのが女のきもちである。そしてすべての女の考えのように、それはきわめて用心ぶかく、じつさい的で地についている。

しかるに男はこの世さへはなれば疾になる、すくなくとも苦しなくなると決めてかかる。それでこの世がちよつとでも苦しくなると、すぐ首をあげてあの世へゆきたがる。まるでしんぼうのない采れた弱虫である。これに反して女はあの世がもつと苦しいとおもうゆえ、どんな苦しみにも堪えてこの世の生を生きぬく。この世にしがみついてはなれない。おそろしく辛捧つよくて耐久力がある。男はとうていかなわない。しかしあの世にかんする予想が、男と女でなぜこうもちがうのであろうか。それはいつもだまされる女が疑いぶかいから、あるいは男がお人好しで信じ易いから、というようなことではとうてい説明されえない。そこには男女の相異なる組織そのものに基づくところの、いっそう深い根柢がある。

人はすべて魂魄から成るうち、女は魄の要素がつよくて魂がよわい。また男は魂が優勢で魄がよわい。もつともこれはただ一般的事で、女でも霊術を愛する人は魂がよわい。そして男で魄ばかり強いのも稀でない。しかしそれらは少数で、だいたいとして男は魂がよわく、女は魂がよよい。そこで男の言うことはたいてい魂のことであり、女のいうことは魄が云うと思つてよい。しかるに前に説いたとおり、魂はどこか天上のたのしい国からこの世へおちたところを魄につかまり、汚い身体の宿に同棲させられたものであるから、すこし苦しくなると、もうすぐ天上へかえりたがる。ただ魂魄離散して死にさえすればきれいな故郷へかえれるとおもうから、すぐ死

んだほうかまじだと考える。それが男のことばや行爲に出る。これに反して魂は真闇な苦しい地下の冥土からやつとこの世に這い上がってきて、そこに落ちた魂を授えて放さず、身体の宿を爰の業として一掃にたのしい日々をおくるものゆえ、またふたたび晴い淋しい冥土へひとり憐るのを何よりもおそれる。すなわち魂をけなして死んだがさいごそこへまたおちてゆかねばならぬと知っているから、どんなに苦しくても魂にくいつきしがみついてこの世に踏みとどまろうとする。この世のほうがるいだけでもまたまじだというのが魂のこころで、そのしぶとい執着がすなわち女の執着にほかならない。それで身体の宿が朽ちて死んでもいつかな魂を放さず、その浮力によって地下に沈むのをまめがれ、ともにこの世をうすつくか、うれいとなって、またやどるべき生身の受胎をうかがい、その匂をもとめて夜なかにせわしく彷徨する。それでもとと魂のつよい婦女が多くはゆ、うれいになるので、ゆうれいといえばまず女にきまつている。女が「出てやる」というのは決してうそではない。

さて地下にうごめく魂の世界、地上にうろつくゆうれいの世界は、この明るい日の照る世の中にくらべて、なんともいえず暗く悲しく淋しい。その淋しさを身にしむように歌ったのが、晩唐の詩人・李長吉である。

65 ゆうれいの歌

李長吉に月午という詩がある。それは日の正午のように物みな影のなくなる真夜中の月の正



千、あまりの淋しさに墓地をさまよいでて新しい亡者の魂を迎えにくるゆうに、かなしいこ  
とばになつてゐる。

南山何其悲 南山の墓地はさびしい、悲しい。

鬼雨瀟空草 雨のゆうれいが、見えないうちにひそひそ降っている。

長安夜半秋 長安の秋ふかい今宵、夜中ごろ。

風前幾人老 風前の灯のように消えそうなのが幾人もある。

低迷黃昏徑 それをとり殺そうと、黄昏の徑をふうわりけけは、

衆賢齊撫道 青くならんだ杖が、やばやと言たて、

月午樹無影 月日いつしか中天に上つて万物のかけなく、

一山惟白曉 ただいちめんになつしるなひかりのなか、

漆炬迎新人 漆列の松月がつづいて新しい亡者のくる喜びに、

幽境蒼接接 い、せいに螢火のように墓場の魂はさわぎたつ。

(× たいまつのは松月、は松明の詩植であるう。)

魂になつた鉄拐の青白く光る眼——無数の死骸の無数のそういう眼が、い、せいにさわめき光り  
だすとき、ゆうれいの魂が、懐えて魂にしがみつくことであるう。その月午のあやしい影のない  
世界を、また地上にはんの月映る地下の螢火のどよめきを、——新しい死者を迎える魂のうれし  
い発光を、晩年のルオはまた好んでその絵にあらわしている。

正誤

第七号 一三頁 14行 それでこの それではこのと訂正。 八八頁 16行、九〇頁 10行 東  
 聚 は 東聚と訂正。九〇頁 1行 『中国文学大家集』 『中国文学大家集』と訂正。  
 九六頁 4行 多年を過っている 多年を送っていると訂正。  
 本第八号にも誤記がある。次号で訂正したい。

後記

第七号を発行してからすでに一年以上になる。『方向』第十五号を発行した昨年の十月なかば  
 ごろから、鉄筆をにぎると、手がふる文たり力がめけてしまつて、字がかけない。ペンや毛筆は  
 にぎれないわけではないので幸いだが、その方にまで及ぶと困るので鉄筆をひかえた。少しよく  
 なつたので執つてみるが、数行かくと力がぬける。春の終るころや、ともにもどつたようだが  
 日々の業務に追われて、本誌のほうに力をさきえなかつた。読者諸賢からたじひ、直接間接に  
 おはげましをいただき感謝しながら、申しわけない気持ちをいだきながら、じつところ文てい  
 かはなかつた。印刷方法をかえることを考えたがそれもけ、きよくうまくゆきそうにない。本号  
 以後の発行はさらに不定期になるかもしれないが、どうかおゆるしいただきたい。  
 お贈りいただいた図書、雑誌等あまたである。あつく感謝する。その自録は割愛させて頂く。  
 本号を戦争の犠牲となつた方々の壺前にささげたい。  
 一九七三年八月十六日二十五時